

# 「何かになる表現」場面で自分なりの身体表現をする幼児と定型的な身体表現をする幼児のイメージと動きの差異と特徴

村瀬瑠美 (千葉敬愛短期大学)

## 1. はじめに

幼児の身体表現においては、幼児が自分なりに表現することを重要視しているが、定型的な身体表現をする幼児も一定数存在している。しかし、幼児の定型的な身体表現は報告されているものの、これまであまり着目されてこなかった。

定型的な身体表現は、先行研究においては「何かになる」身体表現の文脈で見出されている。「何かになる表現」は、多様な身体表現を導くと言われており(村瀬・寺山, 2020), 「多様な身体表現」は、自分なりの身体表現と同じ意味で用いられているわけではないが、定型的な身体表現ではないことはたしかである。しかし、ただ単純に「何かになる」ことが、自分なりの身体表現につながるわけではない。「何かになる」身体表現において、自分なりの身体表現を導くためには、まず、自分なりの身体表現、定型的な身体表現の違いについて、検討しなくてはならないだろう。よって、本研究は、幼児がオノマトペからあらわす「何かになる表現」に着目し、オノマトペに対して自分なりの身体表現をする傾向にある幼児と、定型的な身体表現をする傾向にある幼児の身体表現の差異と特徴を明らかにすることを目的とした。

## 2. 方法

本研究では5歳児13名に対する実験によって明らかにされた。実験は2021年7月下旬, 8月上旬, 中旬の計3回, 10時から11時半にかけて, A幼稚園1階保育室を実験室として行われた。実験で使用するオノマトペの選定は, 村瀬・寺山(2020)の研究を参考に, 「くるくる」「ぴよんぴよん」「ブーン」「ざあざあ」「ぴかぴか」「プンブン」の6つとした。実験は1人の対象者に対して10分前後で行われ, オノマトペに対する反応をビデオカメラで映像記録した。対象者は1人ずつ実験室に入室し, 6種類のオノマトペ(「くるくる」「ぴよんぴよん」「ブーン」「ざあざあ」「ぴかぴか」「プンブン」)を1試技ずつ, 計6試技行った。

対象者13名の映像記録から得られたデータは, 鈴木ほか(2002)を参考に分析した。まず, 筆者が対象者一人一人の映像記録を試技ごとに分割し, イメージと動きのどちらもあらわれた試技を抽出した。次に, 筆者を含めた3人の研究者で試技の映像を共有し, 「何かになる表現」を抽出した。その後, 筆者を含む分析者3人それぞれで, 「何かになる表現」があらわれた試技の映像を評価した。評価にあたっては, 鈴木ほか(2002)が

用いた身体表現を捉える観点を本研究に際して修正したもの(イメージの側面: 「イメージの独自さ」「イメージの具体化」と動きの側面: 「動きの変化」「動きの確かさ」)のそれぞれを身体表現ごとに3点満点で点数化した。3人の分析者の得点から, 対象者ごとにイメージの側面の得点と平均点, 動きの側面の得点と平均点, 両側面の合計得点と平均点を算出し, 自分なりの身体表現をする傾向にある幼児と, 定型的な身体表現をする傾向にある幼児を選出し, 身体表現の差異や特徴を明らかにした。

## 3. 結果と考察(抄録提出時)

### 1) 全体の結果

13人の対象者に対する実験の結果, 全77試技中, 「何かになる表現」は48個得られた。

イメージの側面の最も高い合計得点は対象者Aの99点, 平均点では対象者Cの2.43点であった。一方, 最も低いのは合計, 平均ともに対象者Jの6点, 平均点1.00点であった。全体では, 平均得点は39点(2観点の平均1.66), 中央値は27点(2観点の平均1.50)であった。

動きの側面で最も高い合計得点は対象者Aの93点, 平均点では対象者Dの2.96点であった。一方, 最も低いのは合計得点では対象者対象者Jの6点, 平均得点では対象者J, Mの1.00点であった。全体では, 平均得点は39.15点(2観点の平均1.70), 中央値は24点(2観点の平均1.36)であった。

### 2) 考察

それぞれの観点の得点が高い対象者を自分なりの身体表現をする傾向にある幼児, 得点が低い対象者を定型的な身体表現をする傾向にある幼児として比較考察を行った。オノマトペに対して自分なりの身体表現をする傾向にある幼児は, 独自のイメージを具体的に想起し, 変化のある動きをはっきりと行うことが明らかであった。特にイメージがその幼児独自のものであることが特徴であると考えられた。一方, 定型的な身体表現をする傾向にある幼児は, イメージが具体的でなく, 動きに変化が見られないことが, 特徴であると考えられた。

## 引用参考

村瀬瑠美・寺山由美(2020)身体表現活動におけるオノマトペが幼児に想起させるイメージと動き: オノマトペの性質・意味内容に着目した実験から。体育学研究, 65: 35-52.

鈴木裕子・西洋子・本山益子・吉川京子(2002)幼児期における身体表現の特徴とその援助の視点。舞踊学, 25: 23-31.